

Children's Museum

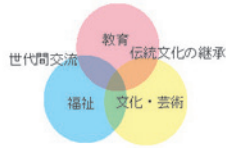
～子供と高齢者の遊び場 学び場 憩いの場～

402707

巖佐 朋広

コンセプト

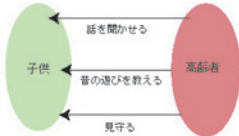
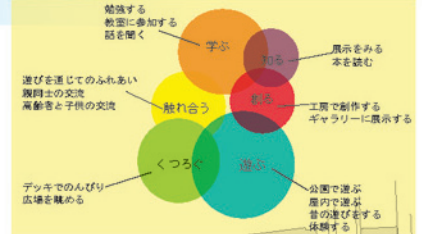
一昔前までは、地域が子供を育てていた。
地域が子供を見守ったからこそ安全であった。
近隣コミュニティが壊れていき、家で安全な場所はなくなった。
しかし、それで何れも抱く子供を育てるのだろうか。
子供が安全に遊べる場所、
子供と高齢者がふれあえる、新たなカタチが必要となる。
子供が高齢者とふれあう事で、家庭教育でもなく学校教育でもない新たな教育の場となる。
高齢者は子供とふれあう事で、生きがいを持ち、生きる活力を得られる。



Museum ミュージアム「Museum」の語源。
ギリシャ時代、世の中さまざまな事項について議論をし
芸術や科学哲学をまみ出していった場所。

子供たちにとってのMuseum

すなわち、いろいろな人と出会い、様々な体験をすることで、豊かな心
と創造性を養い、成長していく場所となる事を期待する。



机の前で勉強する事だけが「学ぶ」という事ではない。
人とふれあう事、体験する事、何かを創造する事も「学ぶ」という事である。
しかし、テレビゲームやネットが普及し、最近の子供達はそのような事ではなくなった。
いや、むしろ大人がそういう場所をなくしてしまった。
子供たちが自由に、遊び学べる場所を提案する。

計画背景

ロ子供
近年、子供が遊ばなくなった。テレビゲームが普及した事が大きな理由であろうが、
外部に安全な場所がなく、親が外に出たからない事も一つの理由である。
また、核家族化が進み、高齢化社会にも関わらず、高齢者とふれあう機会が大幅に減少している。

ロ高齢者
近年、高齢者が増加している。敷地周辺の高齢化率は23.1%である。
生きがいなく、道端や図書館などの施設でもせず閑居に暮らしている人が多い。
高齢者用の交流施設もあるが、高齢者だけの世界になりかねない。

ロ市街地の衰退
モータリゼーションの進行で、郊外の大型商業施設が増え、市街地の商業が衰退している。
市街地から人が去り、魅力のない都市となっている。
しかし、この地域には、津市の伝統文化・歴史的財産が多く残されている。



津市の中心地に位置する。
駅は交通量の多い、国道2号の傍に接している。
西側には、お城公園があり、石垣や櫓、堀が
昔を偲ばせる。
この敷地は数年前まで大手商業施設があった
が、遊園地駐車場となっている。

1

配置計画

津城の歴史

戦国時代
織田信包によって津城が築かれる。

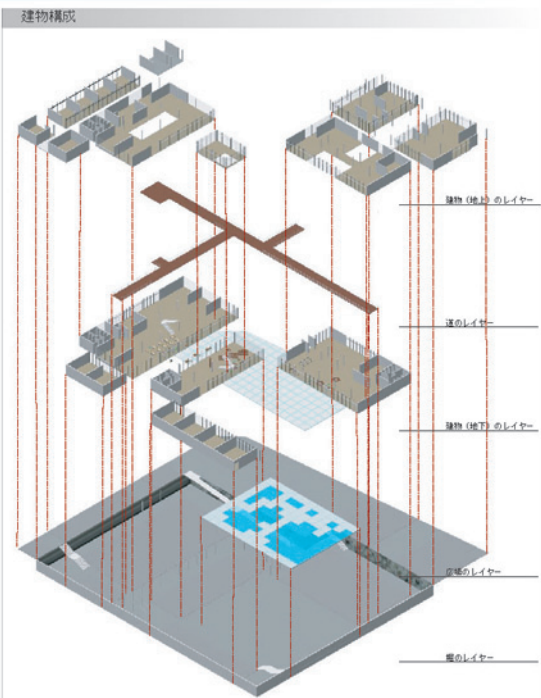
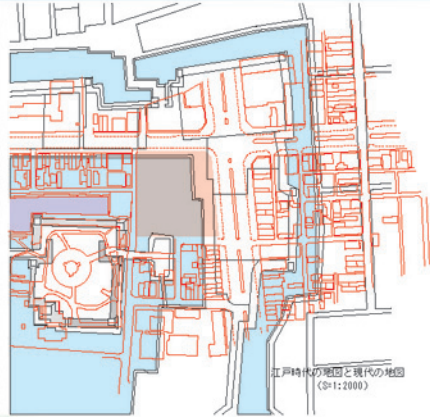
江戸時代前期
城造りの名人といわれた藤堂高虎によって大改修される。
このとき、現在復元された櫓も建てられる。

第二次世界大戦後
戦後の復興計画で、櫓の多くは壊れられ、一部を残すのみとなった。

現代
復元された櫓と、残された石垣と堀が当時を偲ばせる。
しかし、中心部から櫓は見えず、津城に魅力を感じる人
は少ない。

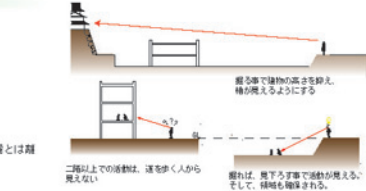
そして...

再び、城の存在価値を高めるため
失われた堀を活かし、櫓が際立つよう配置計画する。
櫓に見守られるように、子供と高齢者が活動する。



掘る

戦後に失われた堀を活かし、敷地内の堀だった部分を掘る。
掘る事で建物のボリュームを上げて、櫓への視線を通す。
掘られた場所が、一つの楕円として明確にとらえられる。
見下ろす事で、活動が見える。
楕円が明確になること、通り人から見られる事で、
高齢者と子供の安全性が確保される。
地下レベルに活動空間を置く事で、都市部でありながら都市の喧騒とは離
れた空間を演出する。



道を渡す

人が行き交い、道から子供や高齢者の活動が見下ろせる。
既存の道で、手がかりに道を決定することで、市役所・リージョンプラ
ザから中心地に向かう人が通り抜けられる。
この施設を目的地としない人でも、通り抜けが可能になり、ふら
っと立ち寄ることが出来る。

広場をつくる

広場をつくる事で、都市に快適さを与える。
水の広場は、現代の場のラインに沿って計画。
中心市街地とお城公園、市役所を結ぶ。広場を連続させる。
お城公園の緑に対して、動の空間を演出。

Zoning

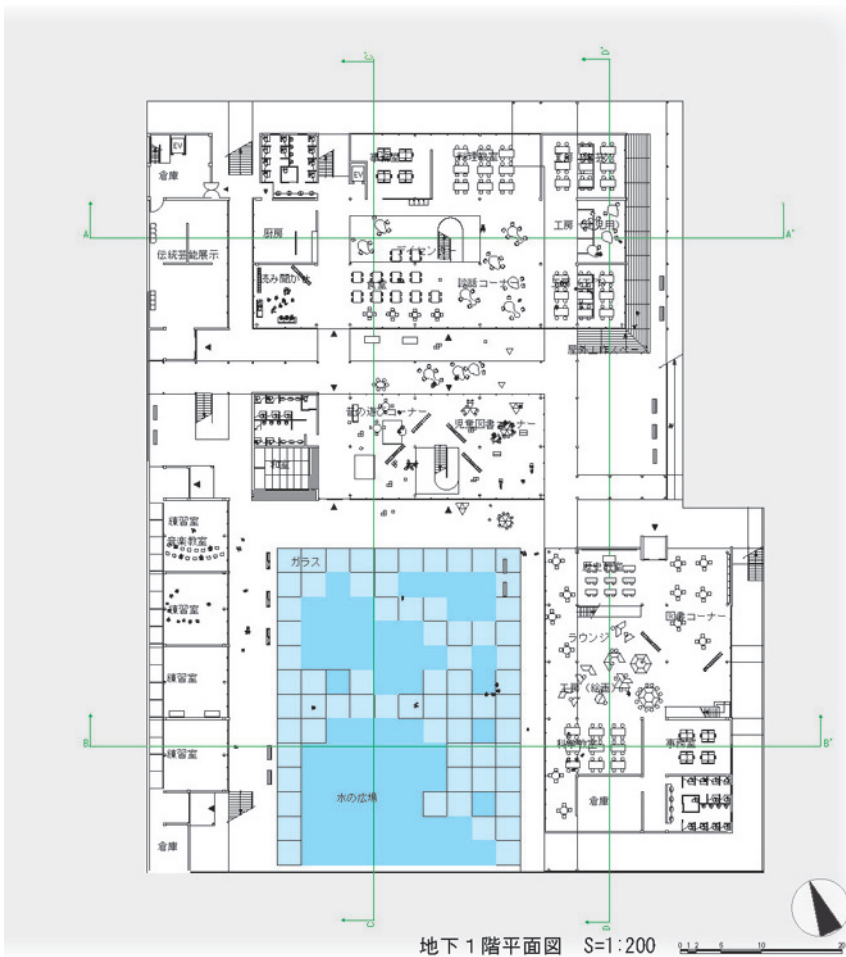


2

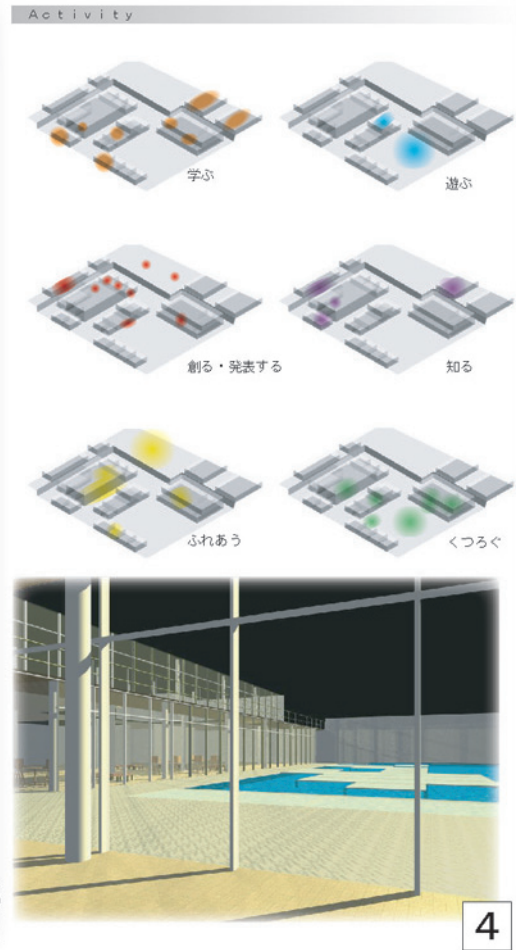


1階平面図 S=1:200

3



地下1階平面図 S=1:200



4

